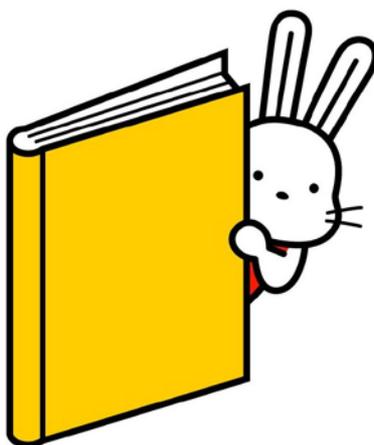


市の事業を「協働」の視点から検証した報告書



平成18年 3 月25日

ふくしま協働のまちづくり市民推進会議

目 次

I 検証の目的・経過

- (1) 目 的 1
- (2) 作 業 の 経 過 1

II 試行的に実施した検証作業報告

- 検証作業の対象事業 2

□ 『小冊子「子どもを伸ばすジェンダーフリーなことば」の発行』 (情報デザイン工房ann/総務部男女共同参画センター) 3
□ 『こっちもいいぞい! 信夫山情報サイト“信夫山.com”』 (魅力ある福島をめざす会/商工観光部観光課・都市政策部環境課) 6
□ 『金谷川駅前花植えプロジェクト』 (地域活性化プロジェクトSEAL's/都市政策部交通政策課) 9
□ 『農業との共生事業「出前教室承ります」』 (ふくしま女性起業研究会/農政部農業振興課) 12
□ 『ふくしま花案内人養成講座』 (ふくしま花案内人/商工観光部観光課) 15
□ 『地震災害に対する住まいと街の安全フォーラム』 (社)福島県建築設計協会県北支部青年部/市民部防災室・都市政策部開発建築指導課) 18

III 市の事業を「協働」の視点から検証する仕組みに関する提案

- (1) 検証作業に関する感想・意見 21
- (2) 市の事業を「協働」の視点から検証する仕組みへの提案(試案) 21

II. 試行的に実施した検証作業報告

○ 検証作業の対象事業

検証の目的からすれば、本来は市が行うすべての事業（現在進行中の事業及び今後新たに計画・実施される事業を含む）及びそのすべての事業過程を検証の対象とすべきですが、今回は試行的に行うことから、「ふくしま協働のまちづくり事業〈コラボ☆ふくしま〉」により平成16年度及び平成17年度に実施された次の6つの活動を対象として検証作業を行いました。

- 検証事例①／ 『小冊子「子どもを伸ばすジェンダーフリーなことば」の発行』
Partner：情報デザイン工房ann／総務部男女共同参画センター
- 検証事例②／ 『こっちもいいぞい！信夫山情報サイト“信夫山.com”』
Partner：（魅力ある福島をめざす会／商工観光部観光課・都市政策部環境課）
- 検証事例③／ 『金谷川駅前花植えプロジェクト』
Partner：地域活性化プロジェクトチームSEAL's／都市政策部交通政策課
- 検証事例④／ 『農業との共生事業「出前教室承ります」』
Partner：ふくしま女性起業研究会／農政部農業振興課
- 検証事例⑤／ 『ふくしま花案内人養成講座』
Partner：ふくしま花案内人／商工観光部観光課
- 検証事例⑥／ 『地震災害に対する住まいと街の安全フォーラム』
Partner：（社）福島県建築設計協会県北支部青年部／市民部防災室
都市政策部開発建築指導課

以下、各事例ごとに検証結果を報告します。

Ⅱ. 試行的に実施した検証作業報告

○ 検証作業の対象事業

検証の目的からすれば、本来は市が行うすべての事業（現在進行中の事業及び今後新たに計画・実施される事業を含む）及びそのすべての事業過程を検証の対象とすべきですが、今回は試行的に行うことから、「ふくしま協働のまちづくり事業〈コラボ☆ふくしま〉」により平成16年度及び平成17年度に実施された次の6つの活動を対象として検証作業を行いました。

- 検証事例①／ 『小冊子「子どもを伸ばすジェンダーフリーなことば」の発行』
Partner：情報デザイン工房ann／総務部男女共同参画センター
- 検証事例②／ 『こっちもいいぞい！信夫山情報サイト“信夫山.com”』
Partner：（魅力ある福島をめざす会／商工観光部観光課・都市政策部環境課）
- 検証事例③／ 『金谷川駅前花植えプロジェクト』
Partner：地域活性化プロジェクトチームSEAL's／都市政策部交通政策課
- 検証事例④／ 『農業との共生事業「出前教室承ります」』
Partner：ふくしま女性起業研究会／農政部農業振興課
- 検証事例⑤／ 『ふくしま花案内人養成講座』
Partner：ふくしま花案内人／商工観光部観光課
- 検証事例⑥／ 『地震災害に対する住まいと街の安全フォーラム』
Partner：（社）福島県建築設計協会県北支部青年部／市民部防災室
都市政策部開発建築指導課

以下、各事例ごとに検証結果を報告します。

検証事例①

平成16年度福島市協働のまちづくり事業<コラボ☆ふくしま>補助対象活動

『小冊子「子どもを伸ばすジェンダーフリーなことば」の発行』

活動の実施主体(市民活動団体) / 情報デザイン工房 ann

協働のpartner(市担当課) / 総務部男女共同参画センター

■ プロフィール

- ▶ 情報デザイン工房 ann (代表 齋藤 美佐)

「ジェンダーフリー」な生き方ができる社会の実現に向けて、市民の視点から効果的な情報発信を行うことを目的に、平成16年5月1日に設立された任意団体。会員数5名。NPO法人の会報誌や講座テキスト作成などの実績を持つ。
- ▶ 総務部男女共同参画センター

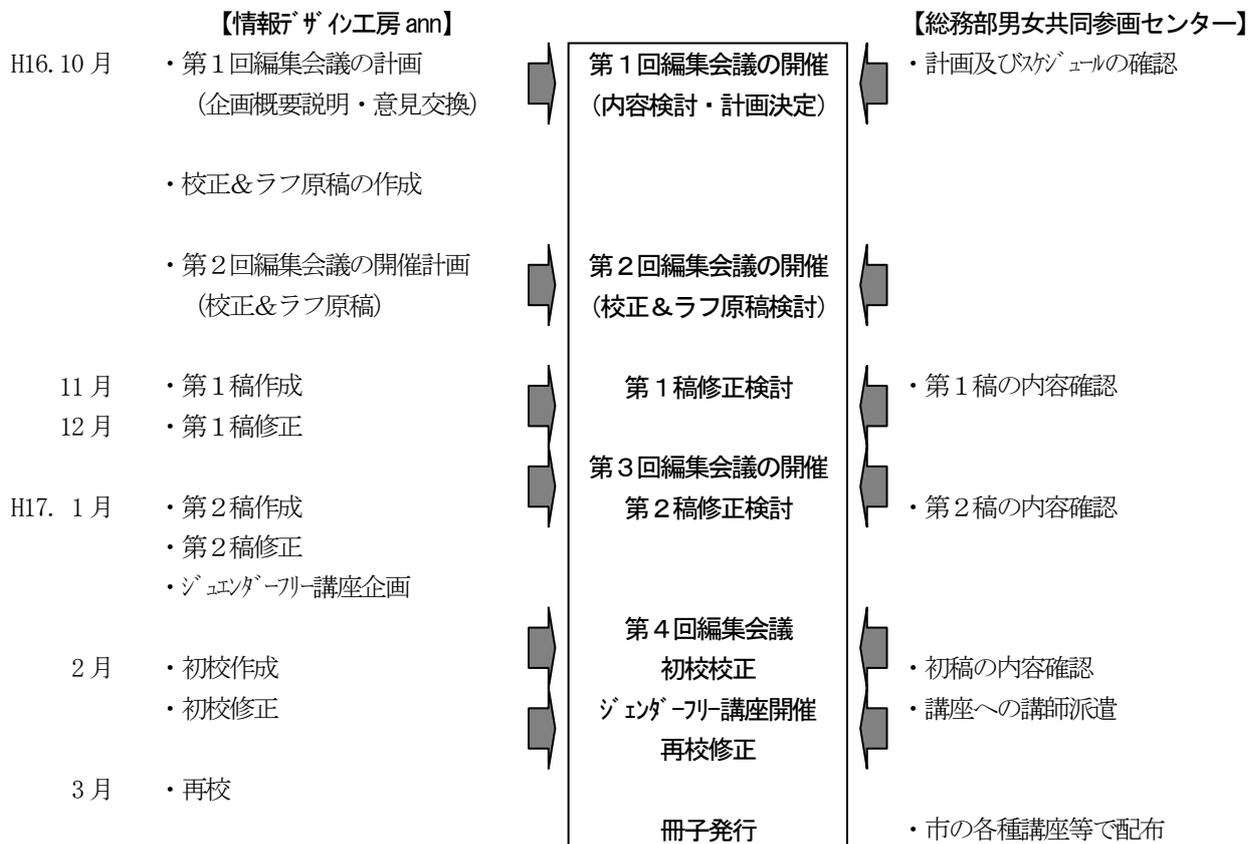
男女共同参画の企画、推進及び連絡調整や相談に関する業務を担当。

■ 活動の概要

「ジェンダーフリー」に対する正しい理解と実践を促すため、小冊子「子どもを伸ばすジェンダーフリーなことば」を編集・発行した。(翌年度、市民へ無料配布)

- 事業費 : 250,605円
- 事業期間 : H16年10月～H17年 3月

■ 活動の主なプロセス



■ 活動の実施に関するコメント

情報デザイン工房ann		総務部男女共同参画センター
(※ふくしま協働のまちづくり事業コラボ☆ ふくしまへ応募した)	〈互いをパートナーとして 選んだ理由〉	(※ふくしま協働のまちづくり事業コラボ☆ ふくしまへの応募があった)
作成した冊子の信頼性を高め、一人でも多くの市民に「ジェンダーフリー」に対する理解を広く深めたかった。	〈「協働」で活動を実施することの目的 (趣旨)〉	男女共同参画社会の実現に向け市民と情報交換を図ること。
個人レベルでは受け入れてもらえない公共機関などでの配布を可能にし、作成した冊子を効果的に配布すると共に、市民の安心感を確保したうえで読んでもらえる。	〈「協働」で活動を実施することで期待した成果 (効果)〉	「ジェンダーフリー」という概念を、幅広い市民の方々に正しく理解していただくと共に、その啓発を図ることができる。
<p>資金の補助で無料配布が可能になり、子育てしている方々に負担をかけず手元に届けることができ喜ばれた。</p> <p>また、福島市が協働しているということで、教育関係の方から授業に活用したいという声や県外から届けてほしいという要望が寄せられ、ジェンダーフリー教育の一助となった。</p> <p>子育て中の保護者からは、見やすく分かりやすいという声が寄せられたことで、理解が深まったと捉えている。</p>	〈実際に得られた成果 (効果)〉	市民活動団体と協働で活動を実施できたことは、別の視点から男女共同参画の推進を捉える良いきっかけとなった。
<p>大切な財源から補助金をいただくことを理解する一方で、提出書類に不慣れで作業が遅れた。3分の1の自己負担は大きく、予算は行政で確保していただき、企画や作業の協働が実施されることが望ましい。</p> <p>また、活動の実績を踏まえ、継続的な協働を行うことが真のまちづくりであると思う。</p>	〈課題と展望〉	二年目の活動に対する支援策。

※ ここに掲載した内容は、検証にあたり当該市民活動団体及び市担当課から提出いただいた資料に基づくものです。

検証結果

- 〈公共・公益性〉 ☉ 「ジェンダーフリー」に対する正しい理解を促すために小冊子を作成し、子育て世代の市民を中心に配布しながら普及を図ろうとした。
- 〈自主性・自立性〉 ☉ 明確な目的を持って自発的に取り組んでいた。また、目的を達成するための十分な能力や技術を備えていた。
- 〈関係性〉 ☉ 当該市民活動団体と市担当課が同じ目標、同じ想いを持って取り組んでいた。一連の作業も一緒に行っており、互いに気兼ねのない良好な関係を構築していた。
- 〈継続性〉 ☉ H17年度には、作成した小冊子を活用し保健福祉センターや各学習センター等で啓発活動を行っていた。
- 〈地域性〉 ☉ 「ジェンダーフリー」という概念を、市民が正しく理解する必要があることを的確に捉えていた。
- 〈実現性〉 ☉ 小冊子の構成やイメージなど、企画段階では当該市民活動団体と市担当課が一緒に行っていた。実施段階では、当該団体が原稿の素案を作成した後に市担当課も加わって検討するなど、適切に役割分担していた。特に、市担当課が検討の過程で専門的見地から精査が必要と判断し、専門家を招き監修を依頼していた。
- 〈連携による成果〉 ☉ 行政と一緒に作成したことで、小冊子の信頼性を高めることが出来た。また、配布先や活用を大きく広げることができた。

➤ 市民活動団体と市担当課との意識の違い

- 市民／ 当該活動に関しては、意識の違いは見られなかった。
行政／ 当該活動に関しては、意識の違いは見られなかった。

➤ どこをどうすれば、もっと「協働」を深められるのか？

- ・ 企画段階から実施段階に至るまで市民活動団体と市担当課が一緒に取り組んでおり、深い「協働」の形で実施されていた。
- ・ しいて挙げれば、作成した小冊子の活用に関してはあまり連携の状況が見られなかった。次年度についても、市民・行政双方が一緒に取り組むべきと感じた。

➤ 全体的な印象

「ジェンダーフリー」を正しく理解してもらいたいという熱い想いを持った市民と、行政の目的が一致した事例であり、「協働」の良い形を見ることが出来たと考える。

検証事例②

平成16年度福島市協働のまちづくり事業<コラボ☆ふくしま>補助対象活動

『こっちもいいぞい！信夫山情報サイト “信夫山.com”』

活動の実施主体(市民活動団体) / 魅力ある福島をめざす会

協働のpartner(市担当課) / 商工観光部観光課 観光振興係

都市政策部公園緑地課管理係

■ プロフィール

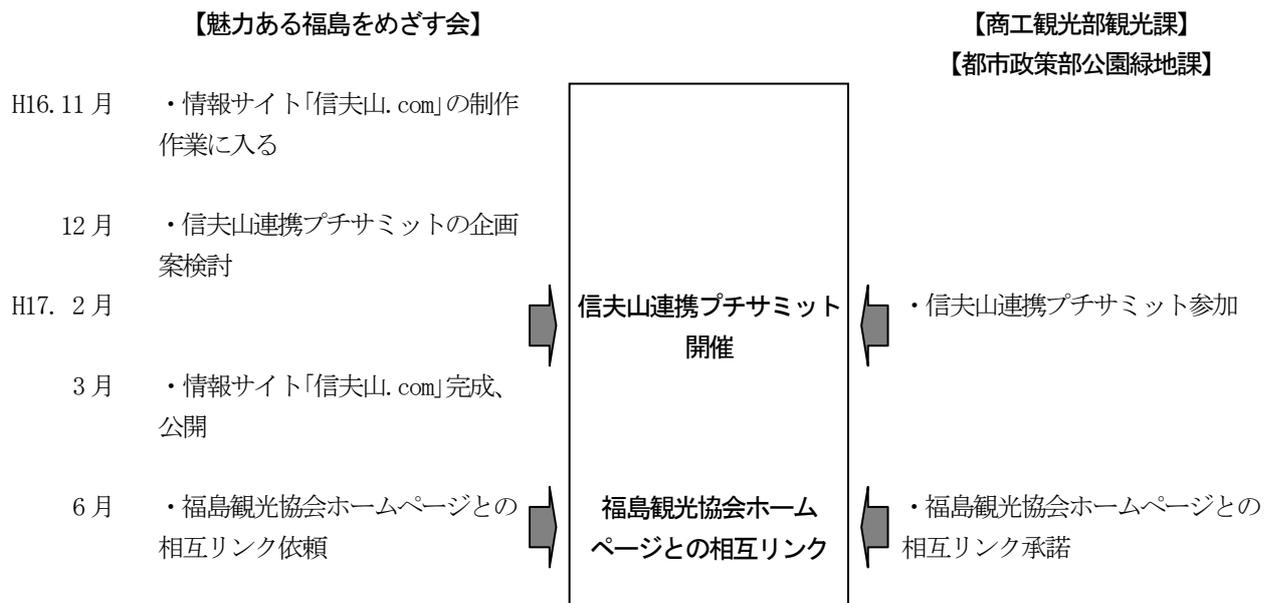
- 魅力ある福島をめざす会 (会長 松田 英明)
住み良い福島の実現を目指して、皆で学習し、まちづくりに参加することを目的に、平成10年4月に設立された任意団体。会員数15名。信夫山散策マップ作成や信夫山連携サミット開催の実績を持つ。
- 商工観光部観光課
観光振興のための調査・計画、観光まちづくりの推進、観光情報の発信及び観光客の誘致に関する業務を担当。
- 都市政策部公園緑地課
都市公園事業等の計画及び施行や維持管理、都市緑化の推進に関する業務を担当。

■ 活動の概要

福島市のシンボルである信夫山の魅力を全国へ発信するため、情報サイト「信夫山.com」を開設すると共に、信夫山に関する情報交換及びネットワーク構築のため「信夫山連携プチサミット」を開催した。

- 事業費 : 622,122円
- 事業期間 : H16年11月～H17年3月

■ 活動の主なプロセス



■ 活動の実施に関するコメント

魅力ある福島をめざす会		商工観光倍増観光課・都市政策部公園緑地課
(※ふくしま協働のまちづくり事業<コラボ☆ふくしま>へ応募した)	<互いをパートナーとして選んだ理由>	(※ふくしま協働のまちづくり事業<コラボ☆ふくしま>への応募があった)
—	<「協働」で活動を実施することの目的(趣旨)>	互いに役割分担することで、情報の収集・発信について相乗効果を得る。 信夫山に関心を持つ市民・団体の多様な意見を集約できれば、今後の公園整備の手法を探る上でも重要と考えた。
第一には資金の援助、第二には情報の共有、第三には広報PRへの協力と活動に対する助言を期待した。	<「協働」で活動を実施することで期待した成果(効果)>	お互いが持っている力を出し合うことで、地域資源の発掘や市内外へ向けた情報発信を期待した。
「信夫山.com」サイトが完成し、運用することが出来た。サイトを見てくれた方々も居り目的の一部は実現できた。	<実際に得られた成果(効果)>	行政では得られない詳細な情報が収集された。また、結果としてサイトの開設運営に係る経費の軽減が図られた。
あまり干渉もされなかったが、助言・提言も受けなかった。もう少し協働の実感を持ちたかった。行政のルーチンワークの中では出来ない計画や夢をぶつけて欲しい。一方で、産・学のノウハウも紹介して欲しかった。	<課題と展望>	当該団体は、自立して活動を実施できるだけの力を持っていたことから、この活動を協働で行うことが適当だったのかどうか疑問が残った。 活動実施の上で、具体的・定期的に話し合う場が無かったため、殆ど関わる事が出来なかった。

※ ここに掲載した内容は、検証にあたり当該市民活動団体及び市担当課から提出いただいた資料に基づくものです。

検証結果

- 〈公共・公益性〉 ➡ 福島の名所である信夫山の情報を広く発信すると共に、プチ・サミットを開催するなどして、信夫山に関わる市民活動団体の連携を目指した。
- 〈自主性・自立性〉 ➡ 当該市民活動団体は、以前にも信夫山をテーマとした信夫山散策マップ(歴史探訪編・ハイキング編)を作成するなど、当該活動を遂行できる十分な力を持っていた。
- 〈関係性〉 ➡ 活動において、当該市民活動団体と市担当課の関わりは殆ど見られなかった。事前の話し合いが良くなされなかったため、お互いの役割が不明確だったのではないかと。
- 〈継続性〉 ➡ サイトに新しい情報を追加するなど今後の管理運営にあたっては、相互に連携をとりながら「協働」の関係を築くことができるのではないかと。
- 〈実現性〉 ➡ 殆どの作業は、当該市民活動団体が行っていた。
- 〈連携による成果〉 ➡ 当初の計画通りに活動を実施(サイトの立ち上げ、プチ・サミット開催)しており事業の完成度は高いが、市担当課との連携が見られず「協働」とは言い難い。

➤ 市民活動団体と市担当課との意識の違い

市民／ 「協働」についてもっと考える必要があったことを認識しつつも、積極的な行政の関わりを求めている。

行政／ 当該市民活動団体の主体性を重視するあまり、市担当課として積極的な働きかけをしなかったことを反省しつつも、当該団体は単独で活動を行うだけの力を持っていたことから、「協働」が適しているのか疑問を持っていた。

➤ どこをどうすれば、もっと「協働」を深められるのか？

- ・ 活動当初に十分協議し、「協働」することの目的や意義をはっきりさせることが必要だったのではないかと。その上で役割分担しながら活動を進めれば、「協働」による効果を得られた。
- ・ 活動当初はもとより、活動中や終了後などにも協議する機会を持つことが重要。

➤ 全体的な印象

互いにメリットの部分だけを求めたに過ぎないのではないかと、という印象を受けた。企画立案の段階から協議を重ね、互いに理解し信頼できる関係が構築できれば良かったのではないかと。相互の働きかけが足りなかったように思う。

検証事例③

平成17年度福島市協働のまちづくり事業<コラボ☆ふくしま>補助対象活動

『金谷川駅前花植えプロジェクト』

活動の実施主体(市民活動団体) / 地域活性化プロジェクトチームSEAL's
 協働のpartner(市担当課) / 都市政策部交通政策課街路施設系

■ プロフィール

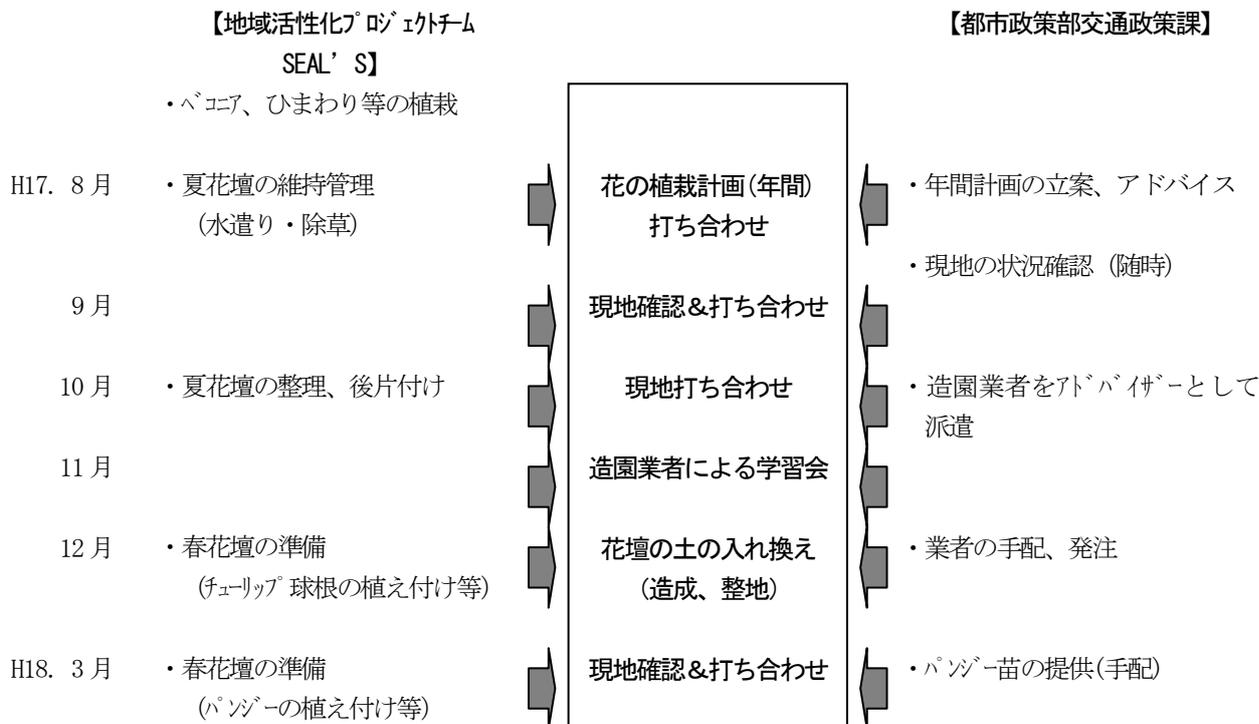
- 地域活性化プロジェクトチーム SEAL's (代表 齋藤 麻衣)
 地域の環境美化や老人ホームなどの施設訪問活動等を通じて、社会に対する意識の向上を図ると共に、健全な地域社会の発展に寄与することを目的に平成17年4月に設立された任意団体。会員数11名。老人ホーム慰問や地域の清掃・花植え活動などの実績を持つ。
- 都市政策部交通政策課
 交通運輸施設の整備促進や街路事業の設計・施行、自転車駐車場や駅前広場の調査・計画及び管理運営に関する業務を担当。

■ 活動の概要

JR金谷川駅前の花壇に、年間を通じ花を植栽するプロジェクトを企画・実施する。

- 事業費 : 60,000円
- 事業期間 : H17年8月～H18年3月

■ 活動の主なプロセス



■ 活動の実施に関するコメント

地域活性化プロジェクトチームSEALs		都市政策部交通政策課街路施設係
(※ふくしま協働のまちづくり事業<コラボ☆ふくしま>へ応募した)	<互いをパートナーとして選んだ理由>	(※ふくしま協働のまちづくり事業<コラボ☆ふくしま>への応募があった)
自分達だけで行うには限界がある。行政と協働することで、更に高いレベルの活動とする。	<「協働」で活動を実施することの目的(趣旨)>	駅前広場という公共の場所での活動である。
団体として活動の幅が広がると共に、大学生がまちづくりに関わることで、地域全体の意識が高まることを期待した。	<「協働」で活動を実施することで期待した成果(効果)>	広場に近接する大学の学生ということで、常に花壇に目が行き届くことから、適切な維持管理を期待した。
自分達だけで行うよりもネットワークが広がり、やりたいことを実際に実現することが出来た。 また、市担当課からアドバイス等をいただいたことで、活動内容が明確になった。	<実際に得られた成果(効果)>	これまで緑地だった駅前広場に、美しい花が年間を通じて見られるようになった。
もっと経過報告を密にすれば良かった。 自分達以外の若者が積極的に参加するよう啓発したり、モデルとなるような活動にできれば良かった。 市と協働することの目的について、もっと考える必要があった。	<課題と展望>	学生で構成された市民活動団体であるため、活動に制約があった。(夏休み等は活動が休止することもあった。)

※ ここに掲載した内容は、検証にあたり当該市民活動団体及び市担当課から提出いただいた資料に基づくものです。

検証結果

- 〈公共・公益性〉 ➡ 駅前広場という公共の場所での活動であり、更には花を植えるという環境美化活動である。
- 〈自主性・自立性〉 ➡ 学生という立場で地域活動に取り組みたい、という想いからスタートしていた。
- 〈関係性〉 ➡ 当該市民活動団体が主体となり、市関係課はサポートに回るという関係にあった。活動当初に互いの役割を話し合った上で取り組んでいる様子が見られた。また、当該団体だけでは専門家とのつながりを持つことは難しく、その部分を市担当課がコーディネートしたことで活動の幅が広がったと思う。
- 〈継続性〉 ➡ 今回は当該市民活動団体だけで行われたが、地域住民を巻き込むことができれば今後も継続して活動できる可能性がある。
- 〈実現性〉 ➡ 当該市民活動団体が種苗の購入や植え付け、除草・水やり等の実作業を行い、市担当課は種苗購入の選定や植栽計画や技術的アドバイス、花壇の土の入れ換え、専門家を招いた学習会開催などを行い、適切に役割分担を行っていた。
- 〈連携による成果〉 ➡ 当該市民活動団体にとっては、行政と連携したことで活動遂行において必要なノウハウを得ることができた。また、専門家との関係を新たに作ることもできたことは今後の展開にとって大きい。
-

➤ 市民活動団体と市担当課との意識の違い

市民／ 自分達だけで活動するよりも、新たな人のつながりや活動に関するノウハウを得たことで活動の幅が広がったと感じていた。

行政／ 行政だけでは手が回らなかった花壇を、良好な状態に維持できることは非常に大きな力を得たと認識していた。

➤ どこをどうすれば、もっと「協働」を深められるのか？

- ・ 地域の高齢者などを活動に巻き込むことができれば、より安定した活動とすることができたのではないかと。
- ・ 当該市民活動団体は学生により組織されていることから、今後団体内(学内)での引継ぎを円滑に行えるかどうか課題。

➤ 全体的な印象

市民側が実行し行政側がサポートを行っているという点で、上手に「協働」できていると感じた。市民の地域活動を、行政がアドバイザー役となり支援し実現に至っている点で理想的な「協働」の形であると思う。今回の活動を通じてできた市民と行政の関係を維持していくことが望ましい。

検証事例④

平成17年度福島市協働のまちづくり事業<コラボ☆ふくしま>補助対象活動

『農業との共生事業「出前教室承ります」』

活動の実施主体(市民活動団体) / ふくしま女性起業研究会

協働のpartner(市担当課) / 農政部農業振興課農業畜産係

■ プロフィール

- ふくしま女性起業研究会 (会長 油井 妙子)

女性農業者としての視点を生かし、起業的在り方を学ぶと共に、農業の素晴らしさや大切さを多くの人に知ってもらい農業の振興につなげることを目的に平成9年7月に設立された任意団体。会員数33名。うつくしま未来博モニターツアー等各種団体を受け入れている実績を持つ。
- 農政部農業振興課

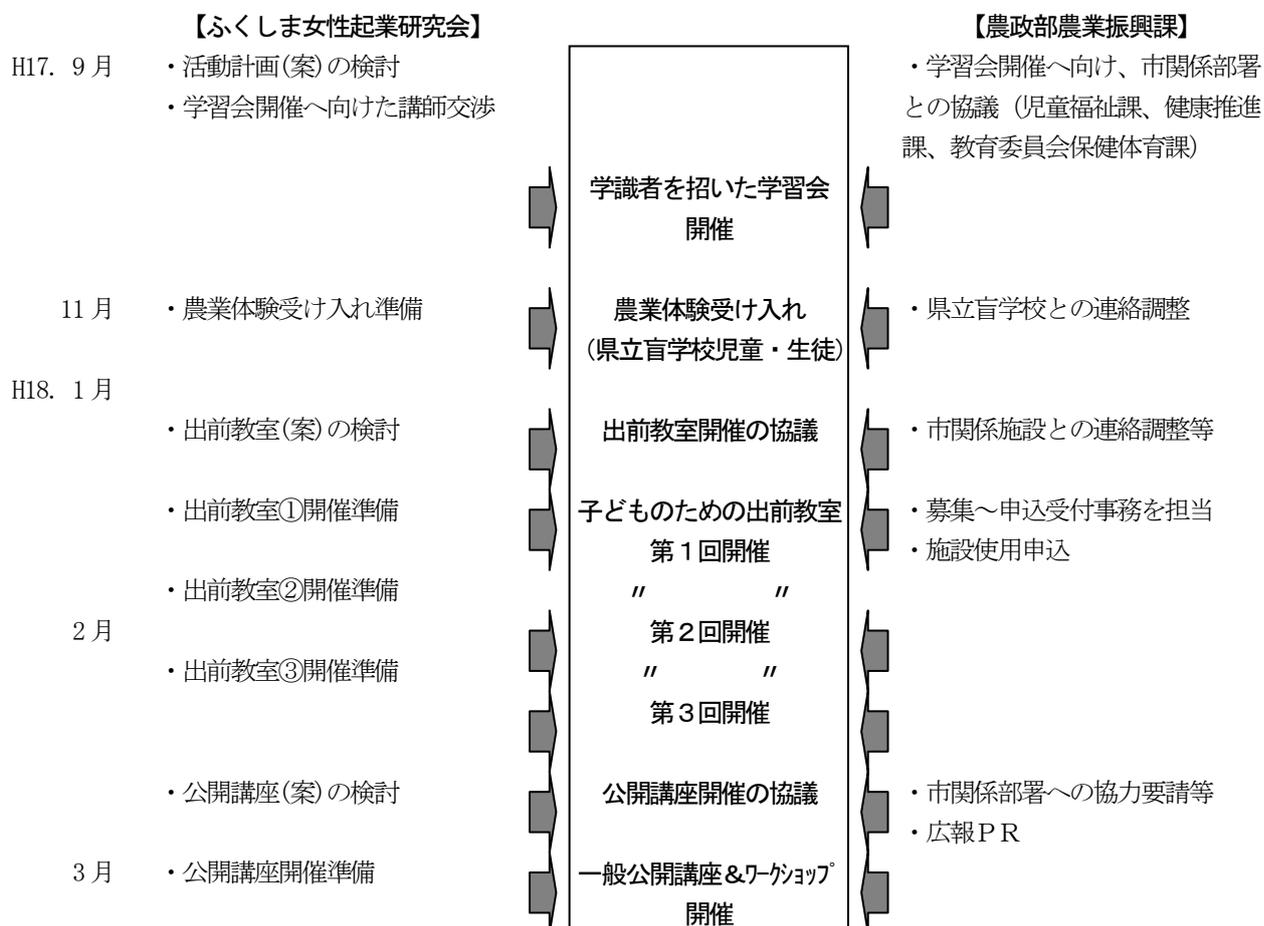
果樹など農作物の振興や営農改善、農家の生活改善、農業担い手の育成等に関する業務を担当。

■ 活動の概要

女性農業者として培ってきた知恵や言葉を通じて「食育」の大切さを伝えるため、「子どものための出前教室・たべるの大好き!」や「一般公開講座・食で何を伝えますか?」を開催した。

- 事業費 : 273,830円
- 事業期間 : H17年 9月~H18年 3月

■ 活動の主なプロセス



■ 活動の実施に関するコメント

ふくしま女性起業研究会	項目	農政部農業振興課農業畜産係
(※ふくしま協働のまちづくり事業<コラボ>☆ ふくしまへ応募した)	<互いをパートナーとして 選んだ理由>	(※ふくしま協働のまちづくり事業<コラボ>☆ ふくしまへの応募があった)
「食」の大切さ、ひいては感性豊かで健康に 生きることを農業の視点から考えることについて、 行政に共通の認識を持ってもらう。	<「協働」で 活動を実施 することの 目的(趣旨)>	「食育」を推進することは地産地消にも 関連し、ひいては農業の振興につながる。
農業を担う農村女性が何を思い、何を伝え たいと考え生活しているのかということ を形にすることで、農業そのものの価値を高め たい。	<「協働」で 活動を実施 することで 期待した成果 (効果)>	農業を担う女性の団体と共に活動を進める 中で、新たな視点から業務を見直す機会を 得る。
(調査時点では、まだ活動を展開中であること からコメントを得られなかった。)	<実際に得ら れた成果 (効果)>	同 上
農作業との兼ね合いから、メンバー全員の 合意がなかなか得られなかった。	<課題と展望>	活動の主体はあくまで市民活動団体で あり、その主体性を損なわない範囲での関わり 方に苦慮した。

※ ここに掲載した内容は、検証にあたり当該市民活動団体及び市担当課から提出いただいた資料に基づくものです。

検証結果

- 〈公共・公益性〉 ② 農業に携わる農村女性の立場から、食べることが人間の感性を育むという「食育」の大切さを普及・推進すると同時に、農業の良さや新しい価値を広く市民に知ってもらおうとした。
- 〈自主性・自立性〉 ② 当該市民活動団体は、食物を生産する農業者という特性を生かし、農業体験の受け入れや郷土料理の講習会などを行っており、当該活動を遂行できる十分な力を持っていた。
- 〈関係性〉 ② 当初、活動計画の一部が具体的でなかったことから、どのように「協働」するか不明確な部分があった。しかし、市担当課を中心に「食育」に関する関係部署と学習会を持ったことで、活動の目的や具体的内容が徐々に見えていった。
- 〈継続性〉 ② 結果的には農政の所管部署が「協働」のパートナーとなったが、「食育」がテーマであれば、教育や児童福祉・保健分野などの所管部署が中心となって継続されるべきと考える。但し、今後の活動について協議されたかどうかは分からなかった。
- 〈実現性〉 ② 活動の内容は、当該市民活動団体と市関係課と一緒に協議しながら企画・立案していた。当日の運営は当該団体が行い、市担当課は会場確保すると共に、関係部署と連携をとりながらそれぞれの関係機関へ広報・PRした。
- 〈連携による成果〉 ② 当該市民活動団体が漠然と抱いていた想いが、市関係部署や専門家と話し合うことで具体的な形となり実施された。

➤ 市民活動団体と市担当課との意識の違い

市民／ 活動を行政と「協働」することには公共性や社会性が求められることに気づき、その要素をいかに高めた内容にできるかという点について苦心していた。

行政／ 会場確保や広報・PRなど事務的な部分を担ったが、農政分野の所管部署ということからテーマとの関連性をどう整理すればよいかについて苦慮していた。

➤ どこをどうすれば、もっと「協働」を深められるのか？

- ・ 「食育」は、様々な分野の関わりが求められる幅広いテーマであることから、行政の側でも農政所管部署が中心となるより、教育や児童福祉・保健分野などの所管部署が中心となった方が、より「協働」できる要素を見つけることができたかもしれない。

➤ 全体的な印象

補助事業への応募段階で、スケジュールや内容(出前教室対象者の絞込み等)をもう少し具体化しておくべきだったと思います。当該市民活動団体と市関係課がスタート時点から一緒に考えることとなり、結果として目的や役割分担を共有できたことが良かった。

検証事例⑤

平成17年度福島市協働のまちづくり事業<コラボ☆ふくしま>補助対象活動

『ふくしま花案内人養成講座』

活動の実施主体(市民活動団体) / ふくしま花案内人

協働のpartner(市担当課) / 商工観光部観光課観光振興係

■ プロフィール

➤ ふくしま花案内人 (会長 松崎 欽榮)

福島市内の花案内を通じて、福島市の観光発展に寄与することを目的に、平成16年6月に設立された任意団体。会員数59名。花見山やJR福島駅前においてボランティアガイドを務める他、花見山花ハンドブック作成等の実績を持つ。

➤ 商工観光部観光課

観光振興のための調査・計画、観光まちづくりの推進、観光情報の発信及び観光客の誘致に関する業務を担当。

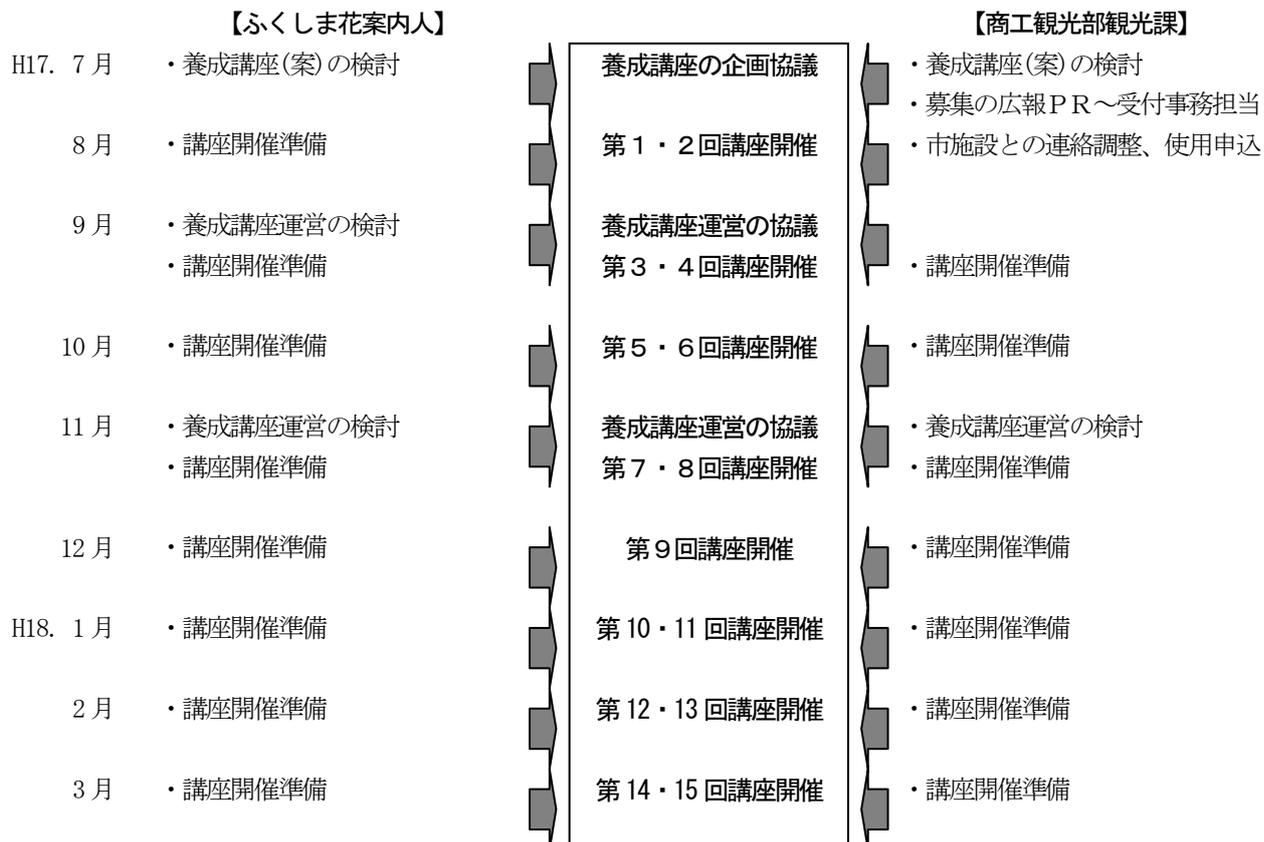
■ 活動の概要

花案内人として、福島の魅力である花やくだもの・温泉などを案内できる質の高いボランティアガイドを養成するため、全15回の養成講座を実施する。

○ 事業費 : 240,000円

○ 事業期間 : H17年 7月~H18年 3月

■ 活動の主なプロセス



■ 活動の実施に関するコメント

ふくしま案内人		商工観光倍増戦略観光振興係
(※ふくしま協働のまちづくり事業<コラボ☆ふくしまへ応募した)	<互いをパートナーとして選んだ理由>	(※ふくしま協働のまちづくり事業<コラボ☆ふくしまへの応募があった)
実際に花見山等での活動を行ってみて人員不足を感じ、市に新たな案内人の養成を要望したが直ちに出来ないということから、協働で実施する事とした。	<「協働」で活動を実施することの目的(趣旨)>	行政の視点ではなく、実際に活動している方々の視点で実効性のある講座内容とする。
前回の養成講座に関するノウハウの助言や応分の経費負担。	<「協働」で活動を実施することで期待した成果(効果)>	同 上
計15回の講座を5班体制で各3回ずつ会員全員が受け持って実施することにより、責任と連帯感が養われた。	<実際に得られた成果(効果)>	充実した講座内容とし、かつ円滑な運営とすることができた。また、結果として講座実施に係る人的・金銭的成本を抑えることにつながった。
本来、このようなボランティア養成の経費は全額行政で負担して欲しかった。	<課題と展望>	互いの役割分担をどのようにすべきかが掴めなかった。(難しかった。)

※ ここに掲載した内容は、検証にあたり当該市民活動団体及び市担当課から提出いただいた資料に基づくものです。

検証結果

- 〈公共・公益性〉 ➡ 当該市民活動団体が自ら行動を起こし、本来であれば行政が取り組むべき事業について福島の魅力をPRするという強い使命感を持って取り組んでいた。
- 〈自主性・自立性〉 ➡ 後に続く仲間を育てたいという想いは、高い自主性から生まれたものと感じられた。また、企画や運営を全て担うことで、自らの資質も高めようとしていた。
- 〈関係性〉 ➡ 当該市民活動団体と市担当課は、共通の目的を持って一緒に取り組んでいた。
- 〈継続性〉 ➡ 受講者は、講座終了後「花案内人」として活動することを前提としているので継続性は高いと思われる。
- 〈地域性〉 ➡ H16年6月より活動しているが、全体的にメンバーの年齢が高いことから団体としての体制維持が難しくなるという危機感があつた。
- 〈実現性〉 ➡ 講座内容の検討や講師選定など、企画段階では市民活動団体と市担当課が一緒に行っていた。実施段階では、両者が役割分担をしながら取り組んでいた。(会場確保は市担当課、講師依頼や当日の運営は市民活動団体)
- 〈連携による成果〉 ➡ 当該市民活動団体としては、市と役割分担したことで事業に対する責任感が高まり、同時に一緒に取り組んでいるという連帯感を感じていた。このことは、団体としての意識の高まりにもつながったと思われる。

➤ 市民活動団体と市担当課との意識の違い

市民／ 仲間の養成という団体としての目的意識に沿って取り組んだものの、「花案内人」は行政の働き掛けによって組織されたという経緯があることから、費用面については行政が担うべきとの想いがあつた。

行政／ 「花案内人」養成の必要性は十分認識していたものの、予算的な面から実施できなかった経過があり、本来は行政自身に取り組むべきだったという認識を持っていた。「協働」で実施する際の関わり方についても戸惑いを感じていたようだ。

➤ どこをどうすれば、もっと「協働」を深められるのか？

- ・ 養成講座の内容や講師選定・会場確保など、ほぼ全般にわたって市民と行政が協議しながら役割を担っており、深い「協働」の形で実施されていた。
- ・ しいて挙げれば、対等なパートナーの関係にあることをもう少し両者が確認できれば良かったと感じた。

➤ 全体的な印象

花やくだもの・温泉などを案内できる質の高いボランティアガイドを増やしたいという市民の想いと、花をキーワードに福島魅力を発信したい行政の目的が一致した事例であり、「協働」の良い形を見ることが出来たと考える。

検証事例⑥

平成17年度福島市協働のまちづくり事業<コラボ☆ふくしま>補助対象活動

『地震災害に対する住まいと街の安全フォーラムの開催』

活動の実施主体(市民活動団体) / (社)福島県建築設計協会県北支部青年部

協働のpartner(市担当課) / 市民部防災室・都市政策部開発建築指導課

■ プロフィール

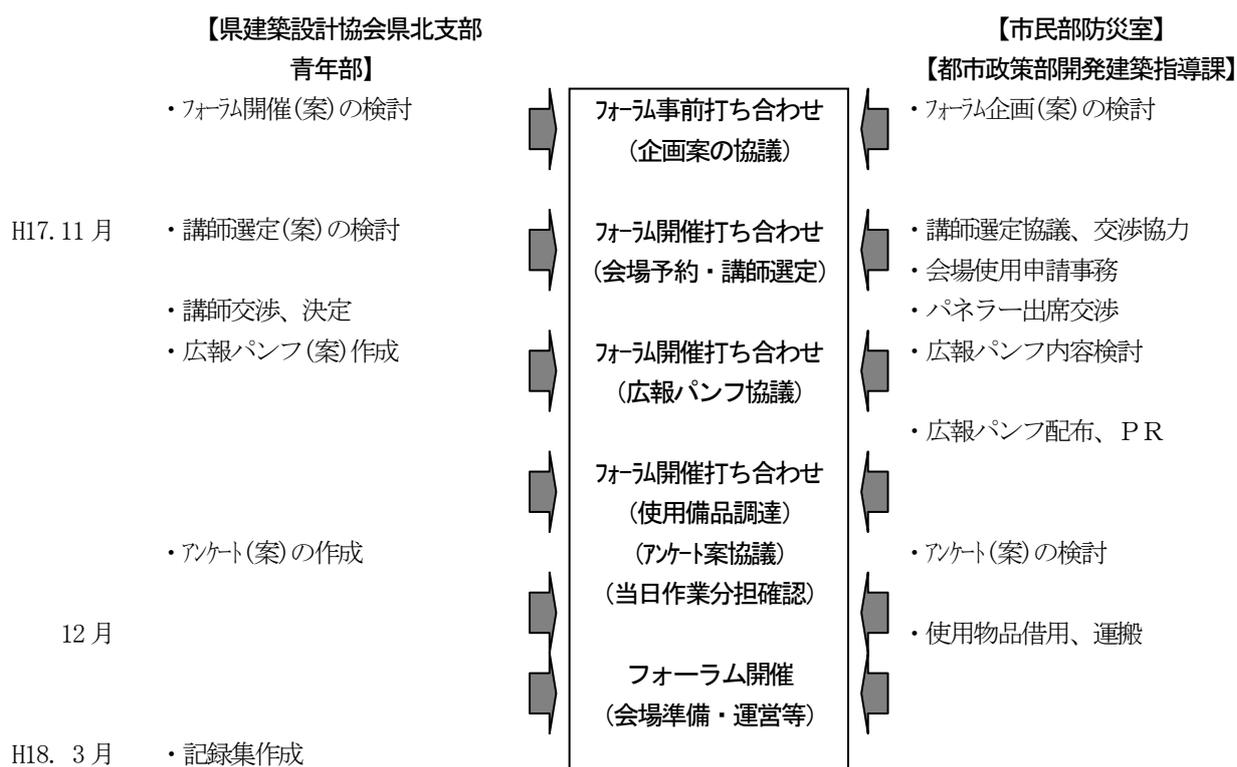
- (社)福島県建築設計協会県北支部青年部 (部長 鈴木 宏幸)
建築設計技術の研鑽と資質の向上を図り、社会資本の充実と建築文化の進展に寄与できる次世代を担う人材育成を目的に、平成13年11月に設立された社団法人。会員数32名。福島古民家マップ制作やユニバーサルデザインフォーラム開催などの実績を持つ。
- 市民部防災室
地域防災計画や災害対策本部に関することや、消防本部及び関係機関との連絡調整業務を担当。
- 都市政策部開発建築指導課
建築基準法・建築物の耐震改修の促進に関する法律等に基づく指導及び審査業務等を担当。

■ 活動の概要

市民に対し防災意識の啓発を図ると共に、住まいとまちの安全対策を推進し多様な視点から地震災害対策を探るため、「住まいとまちの安全フォーラム～地震災害への備えは大丈夫?」を開催し、親子ワークショップやシンポジウムを実施した。

- 事業費 : 624,439円
- 事業期間 : H17年11月～H18年 3月

■ 活動の主なプロセス



■ 活動の実施に関するコメント

(社)福島県建築設計協会県北支部青年部		市民部防災室・都市政策部開発建築指導課
(※ふくしま協働のまちづくり事業コラボ☆ ふくしまへ応募した)	〈互いをパートナーとして 選んだ理由〉	(※ふくしま協働のまちづくり事業コラボ☆ ふくしまへの応募があった)
行政と共に活動を行うことで、防災対策の推進を図る。	〈「協働」で活動を実施することの 目的(趣旨)〉	活動の中に、少しでも市として実施可能な内容があれば一緒に取り組むこと。
防災対策の重要性について、より多くの市民に対し啓発することを目指した。	〈「協働」で活動を実施することで期待した成果 (効果)〉	フォーラムの開催を多くの市民へ周知すると共に、防災意識の啓発を図る。
補助金を得たことで、目的に沿った講師を迎える事が出来た。また、市担当部署の職員と将来の福島について意見交換が出来た。	〈実際に得られた成果 (効果)〉	専門知識をもった市民活動団体とフォーラムを開催したことで、市民が防災について考えるきっかけを作ることが出来た。 また、相互に目的を共有し活動を実施できたことで連帯感が醸成された。
思ったより、広報をしていただくことが出来なかった様に感じられた。講師による実体験を聞く貴重なフォーラムであったが、参加者数があまり多くなかったことは残念だった。	〈課題と展望〉	考え方に多少温度差があり、フォーラム内容(第1部と第2部のつながり・関連性)や会場の選定、広報PR方法等について、十分協議しきれない所があった。 また、当該市民活動団体が持っている性格との関連もあり、活動目的の共有のみで協働することには限界があると感じた。

※ ここに掲載した内容は、検証にあたり当該市民活動団体及び市担当課から提出いただいた資料に基づくものです。

検証結果

- 〈公共・公益性〉 ② 防災意識の啓発は、市民の生命財産を守るという公共の役割につながる。市が目指す「安全安心のまちづくり」を実現する意味からも大変重要である。
- 〈自主性・自立性〉 ② 当該市民活動団体は、建築士や設計士いった専門知識を有するメンバーで構成されており、過去にも様々なテーマで活動を展開してきた実績がある。
- 〈関係性〉 ② 当該市民活動団体と市担当課は、テーマの重要性を十分認識しながら共通の目的を持って一緒に取り組んでいた。
- 〈継続性〉 ② 今回のフォーラム開催を通じ、専門知識をもった当該市民活動団体と市担当課との間に新しい人間関係が形成されたことは、今後連携して取り組んでいける可能性を持っている。市民にとっても関心の高いテーマであり今後も継続すべきだが、具体的な協議は行われていない。
- 〈実現性〉 ② 当該市民活動団体と市担当課が、フォーラム開催へ向け企画検討や運営などについて打ち合わせを重ねながら、それぞれ役割を分担しその責務を果たしていた。
- 〈連携による成果〉 ② 専門知識を有する立場から、特に戸建て住宅の耐震性を高めることが防災を考える上で重要であることを行政の側に投げかける事ができた。

➤ 市民活動団体と市担当課との意識の違い

- 市民／ 一連の活動に関する作業を共に行う中で、市担当課との意見交換ができたことについては評価しているものの、広報・PR(情報提供)に関しては市担当課との温度差を感じていたようだ。
- 行政／ 会場選定など企画に対するアイデアや意見を持っていたが、当該市民活動団体の主体性を重視し、市担当課としてはあえて積極的な働きかけをしなかったようだ。また、二つの課が関わったため行政内部でも戸惑いがあったように感じられた。

➤ どこを、どうすれば「協働」を深められるか？

- ・ フォーラム開催という点については、市民・行政共に成功させたいという同じ想いを持って、協議を重ね準備を進めていた。その意味では「協働」の形が良く現れていたと感じた。
- ・ ただ、本来の目的であった“市民に対し防災意識の啓発を図ると共に、住まいとまちの安全対策を推進し多様な視点から地震災害対策を探る”という点については、互いに多少違った立場にあったと思う。スタート時に、もう少しこのことについて話し合いが持たれれば、継続した取り組みへつながるのではないかと。

➤ 全体的な印象

防災意識の啓発というテーマは、市民が抱えるには大き過ぎるし、行政だけで取り組むにしてもなかなか難しい面がある。その意味で、専門的技術をもった市民と行政が目的を共有し、連携して推進することができれば大きな力＝「協働」の相乗効果が発揮できるものと期待する。

Ⅲ. 市の事業を「協働」の視点から検証する仕組みに関する提案

(1) 検証作業に関する感想・意見

- ・ 検証作業は、思ったよりはるかに難しいものでした。ただ、私達市民が市民(市民活動団体)と行政(市担当課)による「協働」事業を検証するという画期的な作業に関われたことは貴重な経験を得たと共に、非常に重要で、かつやり甲斐のある作業であることを認識しました。
- ・ 検証を行うにあたり、手順や視点の確認に不安がありました。今回は試行ということから、「ふくしま協働のまちづくり事業<コラボ☆ふくしま>」の対象活動を対象として取り上げましたが、今後検証対象の範囲が拡大すると思われるので、今回の反省や手順の改善などを次の作業に生かすべきと考えます。
- ・ 時間的に厳しい中での作業であったことから、事業に携わった市民活動団体及び市担当課から直接話を聞けなかったことは残念だった。今後仕組み作りをする際は、両者へのヒアリングは欠かすことができないプロセスであると考えます。
- ・ 資料やヒアリングだけでは理解し得ない部分もあると感じました。本来なら、その事業が実施されている現場に実際に“立つ”ことが必要ではありますが、事業終了後に検証作業を行う場合は検証にも一定の限界があることを認識しておかなければならないと思います。
- ・ 「協働」スタイルによる事業は緒に就いたばかりであり、今はまだ事業に携わる市民(市民活動団体)も行政(市担当課)も手探り状態にあると思います。ただ、両者が一緒に事業を行うことで「協働」の理解や認識が深まり、姿が見えてくるものと考えます。検証する側としては、そうした状況を見守りつつ「協働」の形が徐々に成熟してゆくことを期待しています。
- ・ 検証する側としても意見は様々であり、そうした意見について協議する時間的余裕があまり無かったことが残念でした。また、検証に際しての視点などについても、もっと議論すべきだったと感じています。
- ・ 試行とはいえ、今回検証作業を行ったことは市民(市民活動団体)及び行政(市担当課)の双方共に「協働」の意識を持ってもらうことが出来たのではないかと思います。今までにない新しい意識を求められるのが「協働」であり、その意味では今回の試行は良い機会だったと考えます。

(2) 市の事業を「協働」の視点から検証する仕組み(試案)

市の事業を「協働」の視点から検証する作業を試行的に実施したことを踏まえ、市民推進会議として『**市の事業を「協働」の視点から検証する仕組み(試案)**』を以下により提案いたします。

この仕組みが確立し、行政(市担当課)と市民(市民活動団体)との「協働」による事業が数多く実施されると共に、その過程を通じて「協働」に関する理解がより深まることを期待いたします。

市の事業を「協働」の視点から検証する仕組み（試案）

■ 目 的

行政（市担当課）あるいは市民（市民活動団体）が「協働」に関する理解を深めると共に、行政（市担当課）にあってはその重要性を認識しながら市民（市民活動団体）との「協働」により事業に取り組むことを推進するため、市が行う事務事業が「協働」の視点で実施されているかどうかについて検証を行う。

■ 根 拠

- 福島市協働のまちづくり推進指針（H14.12.26 策定）第6章
- ふくしま型『市民協働』の事業とするための推進要綱（H16.4.1 施行）第3章第2の（1）

（参考） 福島市協働のまちづくり庁内推進委員会は、各事業担当者が作成した当該チェックシートの提出を任意に求め、これをふくしま協働のまちづくり市民推進会議と共に検証・検討します。なお、詳細については別途これを定めます。

■ 対 象

本市が行うすべての事業（現在進行中の事業及び今後新たに計画・実施される事業を含む。）及びそのすべての事業過程とする。

■ 検証の姿勢

- (1) 検証は「協働」を推進するための手段であり、“良し悪し”を決める(成績付けする)ことが目的ではない。当該事業における「協働」の部分を点検する作業でなければならない。
- (2) 「協働」によって得られた相乗効果や、当事者では気づかない点を確認し認めることが必要。
- (3) より深い「協働」となるよう、ヒントやポイントを示すこと。

■ 方 法

- (1) 福島市協働のまちづくり庁内推進委員会（以下、「庁内委員会」という。）は、事業を実施した担当部署及び関わった市民（市民活動団体）の両者から資料【様式1・様式2】を収集し、市民推進会議へ提出する。
- (2) 市民推進会議は、提出あった資料を基に「協働」の視点から対象事業を検証する。この時、必要に応じ当該事業の関係者に対しヒアリング等の調査を行う。
- (3) 検証作業終了後、結果について庁内委員会へ報告する。
- (4) 庁内委員会は、報告内容を踏まえ「協働」の視点から当該事業の改善に取り組む。

■ 留意事項

市民推進会議は、市の事業における「協働性」をコントロールするものではないことに留意する。

《全体イメージ》

